様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年３月３１日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2009 ～ 2011
課題番号：21720017
研究課題名（和文）ジャイナ教論理学と仏教論理学の比較研究：仏教説に対するアカランカの差異意識
研究課題名（英文）A comparative study of the Jaina logic and Buddhist logic: Akalanka’s way of differentiating his position from the Buddhist
研究代表者
志賀　浄邦（SHIGA　KIYOKUNI）
京都産業大学・文化学部・准教授
研究者番号： 60440872

研究成果の概要（和文）：ジャイナ教論理学者アカランカの仏教説に対する差異意識は、特に刹那滅（瞬間的存在）論証に対して顕著に見られた。アカランカをはじめとするジャイナ教徒は、仏教徒が刹那滅論証の際に用いる＜存在性＞という論証因は正しい帰結とは反対の帰結を導く論証因であると批判するが、その同じ論証因を用いて、独自の立場である＜多面性＞あるいは＜変化すること＞を論証する。ジャイナ教徒にとって、刹那滅論証と多面性論証は表裏一体の関係にあることが判明した。

研究成果の概要（英文）： It was observed through this research that Akalanka differentiates his position from the Buddhist view especially in the arguments on the proof of momentariness. The Jaina logicians, including Akalanka, criticize the logical reason “existence”, which the Buddhist use in the proof of momentariness, as being the reason that leads to the opposite consequence to the proper one, whereas the Jaina logicians prove “manifoldness” or “alteration”, which is a form of the Jaina’s worldview, by means of the same reason “existence”. For the Jaina logicians, the proof of momentariness and that of manifoldness are two sides of the same coin.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学、印度哲学・仏教学
キーワード：インド、ジャイナ教、仏教、論理学、アカランカ、刹那滅論証、多面性論証

１．研究開始当初の背景

(1) 紀元前６－５世紀、ほぼ同時期に古代インドにおいて興隆した仏教とジャイナ教という二つの宗教は、成立当初から多くの共通点を有していた。両者の共通点とは例えば、当時のインドにおいて支配的であったバラモン教やカースト制度に反対の姿勢を取ったこと、また生命の尊重を謳った不殺生主義を掲げたことなどである。また両者は、教義・思想・文化・生活規範等の面においてのみならず、認識論・論理学の分野でも多くの類似点を有していた。

また古代インドにおいては、紀元前後から、「正しい認識・正しい論理とはいかなるものか？」という問いが強く意識されるようになり、「正しい認識」・「正しい論理」に関して、

宗教・学派の枠を越えた共通・普遍の理論体系が求められるようになる。「正しい論理」は、主に推理、命題の論証、他者（特に他学派）との論争・討論の場面において不可欠なものとなり、それらを体系化しようする動きは、仏教徒及びジャイナ教徒の間でも起こり始めた。

(2) 仏教の側では、ディグナーガ（480－540年頃）の手により、インド論理学全体を視野に入れた包括的な理論体系が構築された。その後７世紀には、同じく仏教徒のダルマキールティ（600－660年頃）という人物が現れ、それまで主流であったディグナーガの理論を批判的に継承しつつ仏教論理学の新体系を打ち立てた。

一方、ジャイナ教徒の側からは８世紀にアカランカ（720－780 年頃）という人物が登場し、ダルマキールティの打ち立てた論理学に対抗する形でジャイナ教論理学を大成させた。従来の研究では、アカランカから始まるジャイナ教の認識論・論理学は、仏教認識論・論理学の思想・理論を全面的に取り入れ、半ば模倣することによって体系化に成功したと言われてきた傾向がある。確かに、上に述べたように両者には数多くの類似点が存在するものの、決定的な相違点も数多く見られ、それがジャイナ教独自の教義に基づいている場合も少なくない。アカランカのテキストを丹念に読むとこのことは一層明確になる。アカランカは仏教説に対してむしろ強い差異意識をもっており、特にダルマキールティの見解を痛烈に批判することを通して、自説を確立し展開しようとしているのである。

(3) 申請者は、2006 年に提出した課程博士論文『推理論をめぐる仏教徒とジャイナ教徒の論争とその思想史的意義の考察』において、仏教徒によって著された論書『真理綱要』に引用されるジャイナ教徒パートラスヴァーミンの思想について検討し、主に仏教論理学派の視点から、仏教徒とジャイナ教徒の論争の様相及びその思想史的意義を探求した。上掲論文においては、パートラスヴァーミンが、仏教徒の立てる＜正しい論証因の備えるべき三条件＞に対抗して＜（論証対象がそれ以外の）他のあり方では成立しえないこと＞という一条件を考案し、事実上ジャイナ教論理学の創始者となったこと、そしてアカランカが彼の説を継承しジャイナ論理学を大成した、という仮説を提出した。この仮説を検証するためにも、その歴史的位置づけの妥当性をアカランカの著作の精読によって確認する必要があると考えるに至った。当該分野の現在の研究状況については、国内・国外共にジャイナ教論理学自体の研究者が極めて少ない他、アカランカの専門家となると、インド人研究者以外はほぼ皆無である。アカランカに関しては、シャー氏による概説書、またマヘーンドラクマール・ジャイン氏によるアカランカの著作の校訂本が存在する他は本格的な原典研究は存在しない。ジャイナ教論理学の研究全体を推し進めるためにも、アカランカの著作の原典研究は急務であった。

２．研究の目的

(1) 本研究は、ジャイナ教論理学を大成したアカランカと、仏教論理学派の巨匠ダルマキールティの諸テキストを比較・検討することによって、アカランカがいかにして仏教徒を批判し、またいかにしてジャイナ教徒としてのアイデンティティー及びオリジナリティーを確立しようとしたのかを考察することを目的とする。例えば、仏教徒の主張する「あらゆる事物は瞬間的存在である」という＜刹那滅論＞に対して、ジャイナ教徒はそれを一面的な見方とし、「あらゆる事物は多面的である(＝ある点から見れば瞬間的存在であるが、別の点から見れば瞬間的存在ではない)」と主張する。このようにジャイナ教徒は、あるものの見方に対して必ず「ある点から見れば…」という観点を示す言葉を付加しなければならないとする＜多面的見解＞、すなわち＜相対論＞を展開する。ジャイナ教独自の思想であるこの＜多面的見解＞及び＜相対論＞とアカランカの立てる推理論との関係について、さらには多面性論証とダルマキールティが確立した刹那滅論証との対立関係について、テキストに沿いながら綿密に検討する。

(2) 具体的には、３年間の研究期間の間に、アカランカの代表的著作『論理の決定（ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ)』第２章（推理章）及びヴァーディラージャ・スーリによるその注釈について、（１）テキストの電子化及びデータベース化、（２）『論理の決定』第２章の校訂テキストの作成、（３）『論理の決定』第２章の現代語(日本語あるいは英語)への翻訳及び訳注の作成を行う。テキストの校訂作業及び翻訳作業を通して、アカランカが体系化した論理学がいかなるものであったか、またアカランカが仏教論理学に対していかなる差異意識をもっていたかについて明らかにする。

３．研究の方法

(1) 原典研究：厳密な文献学的方法論に則り、アカランカの著作『論理の決定(ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ、以下 NVin と略)』第２章（推理章）及びそれに対するヴァーディラージャ・スーリによる注釈書（＝ニヤーヤ・ヴィニシュチャヤ・ヴィヴァラナ、以下 NVinVi と略）の校訂テキスト及び翻訳・訳注の作成

を行う。このテキストの最大の問題点は、アカランカ自身の著作の写本が現存しない点にある。マヘーンドラクマール・ジャイン氏によって、２種の校訂本が出版されたが、いずれもアカランカ自身のテキスト NVin は注釈から再構成したものである。テキスト校訂及び翻訳の過程においては、同校訂者が再構成したテキストの正否についても慎重に検証した。翻訳と同時に、当該テキスト及びアカランカの他の著作の電子化も進める。

(2) 思想研究：『論理の決定』はそのタイトルからも推察されるように、先行するダルマキールティの著作『正しい認識手段の決定(プラマーナ・ヴィニシュチャヤ、以下 PVin と略)』を意識して書かれたと考えられる。そのことを検証するため、NVin 第２章(推理章)の精読を進めると同時に、PVin 第２章(「自己のための推理」章)・３章(「他者のための推理」章)との比較を試みる。両テキストの比較を通して、アカランカがどのようなトピックに関して、どのような観点からダルマキールティを批判しているのかが明らかにする。両者の理論の比較の過程を通して、仏教とジャイナ教両派の見解の相違を明らかにする。両者の大きな相違点の一つは、それぞれが認める正しい認識手段の数である。仏教徒は、直接知覚以外の認識手段としては推理のみを認めるが、ジャイナ教徒は、推理以外の間接知として、吟味(タルカ)・想起・再認識・聖典にもとづく知の４つを正当な認識手段と認める。この差異がそれぞれの教義・思想とどのように関係しているかという問題についても研究課題の一つとする。

(3) 以上述べた(1)原典研究と(2)思想研究とを同時並行的に進めることとする。以下に、年度ごとの具体的な研究方法を述べる。
① 研究初年度（2009 年度）は、特に原典研究を優先させた。原典テキストの校訂及び翻訳は、根気と時間を要する作業であるが、この地道な文献学的研究なしには精度の高い思想研究は望めない。逆にいえば、研究の基盤となる正確な校訂・翻訳作業を完成させることができれば、思想研究への移行も非常にスムーズなものとなるといえる。そのため研究期間の前半は校訂テキストの作成と翻訳作業に十分な時間を確保するようにした。初年度はその他、NVin 及び NVinVi 第２章の電子テキスト化を完了した。テキストを電子化することによって、同テキスト内の相互参照・用例検索が容易になる他、仏教文献を含めた他学派の文献からの引用関係等も明らかになった。
② 研究期間２年目(2010 年度)も引き続き、校訂テキストの作成、翻訳作業を進めた。また、翻訳を作成する際、同時に他の文献との関連や別解釈の可能性などを盛り込んだ訳注を作成した。また、アカランカの他の著作の電子テキスト化も行った。アカランカの別の著作のテキストをデータベース化しそれらを相互比較することによって、類似した言い回しや同内容の言い換えなどの検索も容易となり、NVin のより正確なテキスト校訂・内容理解が可能になった。ここまでの成果を受け、ジャイナ教論理学、特にアカランカの思想研究にも着手した。アカランカの認める正しい認識手段あるいは正しい論証因について、さらにはジャイナ教徒の代表的思想である＜多面的見解＞及び＜相対論＞とアカランカの推理論の関係について、テキストに沿いながら包括的に検討した。
③ ３年目（2011 年度）も、ジャイナ教論理学の思想研究を継続して行った。またそれと同時に、仏教論理学との比較研究にも着手した。しかしながら、NVin 第２章を PVin 第２・３章と字句レベルで比較することによって、アカランカとダルマキールティがいかなる関係にあったかを明らかにする、という当初の目的は十分に達成できなかった。この点については今後の課題としたい。研究期間最終年度は、ジャイナ教論理学関連の写本・文献資料の調査のため、インド・アーメダバード大学及び大学付属の研究所 L. D. インスティトゥートを訪れた。またアーメダバード市内において、アカランカ研究の第一人者であるナギン・Ｊ・シャー教授と面会し、同教授と NVin のテキストの校訂・翻訳・読解に関して同教授と意見交換を行い、助言・示唆を頂いた。

４．研究成果
(1) 2009 年度：本研究は二つの側面―原典研究と思想研究―から進めてきたが、2009 年度は、主に原典研究を中心に行った。具体的には、ジャイナ教論理学者アカランカの著作『論理の決定』第２章（推理章）およびそれに対するヴァーディラージャ・スーリによる注釈書（＝『論理の決定・注解』）のテキストの電子データ化および校訂テキストの作成を行った。テキストの電子化によって、同テキスト内の相互参照・用例検索が可能となった他、仏教文献を含む他学派の文献からの数多くの引用関係を確認できた。現代語への翻訳にも着手しているが、『論理の決定』第２章全体の現代語訳の完成には至らなかった。しかしながら、今まで謎に包まれていたアカランカの思想および論理学の体系の全貌が少しずつ明らかになりつつある。
　その他本研究は、ジャイナ教論理学と仏教論理学の比較研究であるため、仏教論理学の側、特にダルマキールティの思想・論理体系についての研究が欠かせない。仏教論理学分野の研究成果としては、2009 年 9 月に京都大

学で行われた第 14 回国際サンスクリット学会において、“Some remarks on the origin of all-inclusive pervasion （全ての場合を包括する遍充関係の起源に関する所見）” というタイトルで口頭発表を行った。また 2009 年 10 月には、「*Tattvasamgraha* 及び *Tattvasamgraha-panjika*」第 18 章「推理の考察（Anumana-pariksa）」和訳と訳注(3)」というタイトルの論文を発表した。

(2) 2010 年度：2010 年度も、昨年度から引き続き原典研究を中心に行った。対象テキストは、ジャイナ教論理学者アカランカの著作である『論理の決定』第２章（推理章）およびそれに対するヴァーディラージャ・スーリによる注釈書（＝『論理の決定・注解』）である。テキストの電子データ化によって、同テキスト内の用語検索が容易になり、テキスト内の相互参照や他のテキストとの比較対照が可能になった。現代語への翻訳作業については、テキストの難解さから予想以上に時間を要し、『論理の決定』第２章全体の現代語訳の完成には至っていないが、徐々にジャイナ論理学の体系およびジャイナ教徒の見解と仏教徒の見解との違いが浮き彫りになってきた。本研究において比較対象としている仏教論理学の分野の研究成果として、“Remarks on the origin of all-inclusive pervasion”を挙げることができる。この論稿は、2009 年９月に行われた第１４回国際サンスクリット学会において発表した成果（“Some remarks on the originof all-inclusive pervasion”）にその後得られた情報・知見を補足して、論文の形に整えたものである。これは、その後 2011 年に学術雑誌 *Journal of Indian Philosophy* に掲載された。

(3) 2011 年度：2010 度までは主に原典研究に取り組んできたが、今年度は、これまでの研究の総括を兼ねて思想研究に集中的に取り組んだ。具体的には、ジャイナ教論理学、特にアカランカの思想について考察した。その際仏教論理学との比較という視点も導入したが、その成果は論文「ジャイナ教徒による刹那滅論批判」としてまとめ、記念論集に寄稿した。本論稿においては、ジャイナ教徒による刹那滅論批判は、ジャイナ教自身の主張する多面性論証といかなる関係にあるのか、仏教徒ドゥルヴェーカミシュラの紹介するジャイナ教説とアカランカの刹那滅論批判にはどのような共通点および相違点があるのか等の問題について明らかにした。2011 年８月には、ジャイナ教論理学関連の写本・文献資料の調査のため、インド・アーメダバード大学および L. D. 研究所を訪れた。アーメダバードでは、アカランカ研究の第一人者であるナギン・Ｊ・シャー博士との面会を果たし、ジャイナ教論理学について、またアカランカの著作に関して意見交換し、学術交流の機会をもつことができた。アーメダバード近郊のパタンを訪問した際には、ジャイナ教寺院に隣接する図書館において、種々の写本の電子データを閲覧および入手することができた。その他、仏教論理学関連の成果として、以前に執筆した２つの論文“Remarks on the origin of all inclusive pervasion” と“antarvyapti and bahirvyapti re-examined”（Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analysis に収録）が今年度出版の運びとなった。またサーンキヤ学派のテキストの翻訳研究である共著論文「Yuktidipika 87,18-91,17 (ad SK 6ab) 和訳と注解」が出版された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 志賀浄邦・志田泰盛、Yuktidipika 87, 18-91, 17（ad SK 6ab）和訳と注解、インド学チベット学研究、査読有、第 15 号、2011、1－34
② 志賀浄邦、Remarks on the origin of all-Inclusive pervasion、*Journal of Indian Philosophy*、査読有、vol. 39、2011、521-534
③ 志賀浄邦、*Tattvasamgraha* 及び *Tattvasam-grahapanjika* 第 18 章「推理の考察（Anumana- pariksa）」和訳と訳注(3)、インド学チベット学研究、査読有、13 巻、2009、98－140

〔学会発表〕（計１件）

① 志賀浄邦、Some remarks on the origin of all-inclusive pervasion、第１４回国際サンスクリット学会、2009 年９月４日、京都大学

〔図書〕（計２件）

① 志賀浄邦・他、Verlag der Österreichischen Akademie der Wissen- schaften、*Religion and Logic in Buddhist Philosophical Analy-sis: Proceedings of the Fourth International Dharmakirti Conference, Vienna, August 23 -27, 2005*、2011、423－435（*antarvyapti* and *bahirvyapti* re-examined）
② 志賀浄邦・他、奥田聖應先生斯学 50 年記念論集、2012、掲載決定（ジャイナ教徒による刹那滅論批判）

６．研究組織
(1)研究代表者
志賀　浄邦（SHIGA　KIYOKUNI）
京都産業大学・文化学部・准教授
研究者番号：60440872